



























念腹句集第二

佐藤念腹

春

珈琲の花明りより出でし月

道広く片寄り行くや花珈琲

野良戻る馬の尻より春の月

春の月行かぬは意固地なりしかや

たんぽぽや馬を下りたる身を投げて

馬つなぐ幹鳴きからむ虻の声

巢籠るや撓めし園のよき枝に

花種を蒔くや輪を画きある土に

列つくるチューリップより園を出づ

チューリップ塀を降りたる群インコ

芹の籠水を跨ぎて移しけり

芹摘むや流の中の力杭

此の家に見し飼屋の娘厨の娘

蚕飼女や今日暇乞ふ薄化粧

切藁の突き刺す穴に南瓜蒔く

馬の背に並べ替へつゝアーリヨ売る

煤煙のたちこめて春めくとかや

漂へる鰻の投餌や水温む

菜飯炊く河港泊りの船の妻

春水を料理を運び子を抱き来

老の頬にふくみて堅しヂヤボチカバ

子女大きくなりし孀の春の風邪

南風より強東風となりマンガ咲く

菫の雨寒しと汚れシャツ重ね

立てかけの館にあるや春暖炉

山荘の赤きソファに客と蝶

移しき蝶の羽屑を見て花圃に

すみれには蝶来ベンチは今二人

花園を飛び来て孕み猫なりし

古径は蛭の流に切れてあり

罇や昔は畑今牧場

罇の移りて牛も樹下に居ず

春の泥人踏まぬまゝ乾きたる

抱へ来し凶書の春泥靴に無し

日本語を学ぶホ句会春燈下

春燈下靴てらてらと客迎ふ

虻飛んで当りし音や袋掛

枝の上に出て居る顔や袋掛

掃苔の碑に毛布巻く物語

恋をする命惜みて墓参

慌しき墓参なれども心足り

菜芙蓉咲けどその名忘れて移民古る

春めける映画館前宵となる

朝寝して心づくしの飯につく

穴を出づ蟻土くれを抱ける蟻

地価高く借料安し薯植うる

霞みつゝ亜熱帯行く驟馬の人

春泥を来て長椅子に眠り居り

春風や濃き色塗れる靴磨

春風や子を抱く花輪抱く如く

珈琲の蕊東に畝を掃く

捨て馬の来て蕊の鳥翔たず

馬下りて三人這入る鬪牛士

鬪牛や柵にのぼりて憩ふ騎士

春寒き八月生れは不倖せ

麦鶉啼いて馬車着くホテルかな

池の鯉捕れずじまひの田螺和

田螺汁ビール麦藁くさくなる

帆を立てゝ浮くは田螺よ昼蛙

夜の墾や琴弾く蛙切株に

ピツコンの他にも異人摘むらしや

陽炎うて日本の裏の開墾地

バス来れば柵なき牧に仔馬跳ね

少年の相も仔馬もよき馬車屋

塀内の耕されてゐて町古りし

耕牛の啼く時口輪とりにけり

開墾に割けたるシャツや雛合

雛合せ恥をさらしに来し如し

鳥雲に田舎のバスの発つ支度

鳥雲に行く牧場主来る耕主

親仔牛五頭の旅に後ろ東風

親の尾が仔馬の貌に丸かぶり

屋根替や鳥の古巢の一ト俵

墾屋にも煤垂れ初めぬ干鱈吊る

転耕車休めば寄り来道の山羊

転耕地近しや森の雨太き

親鳥のゆさぶる枝へ巢立ちけり

喜びの胸抱く裸像春の芝

店に向く舗道のベンチ木の芽吹く

夕燕邦人の店又見かけ

銃先に春の月出づタツ―狩

牧牛を集めし上の春の月

春燈や菓子をつまめば犬見上げ

春愁の妻日記書く夜半かな

菹粥を炊くとき貧しわが墾屋

春窮や買ひ手もつかぬ古耕車

蠅生る野路齒をむいて犬通る

荷を重く人来る道の猫の恋

草鬪牛今日灰色の印度牛

濯ぎ女や流掬ぶは鬪牛士

朝東風に野良を急ぐや馬竝めて

綱つけて牛曳ける騎馬霞み行く

蝶々やオルガン弾ける牧の家

春の風この国の老杖もたず

初蝶や燕を描きし路地の壁

初燕燕の町の塔かすめ

花大根牛曳いてわれ今農夫

大根の花に二世ら四十過ぎ

春愁の妻に飯炊く夕来し

朧夜の塀にも情ふれて行く

ものの芽の一つひとつに蠅とまり

草摘みて草食む馬の前に又

楽器の樹香水の樹や樹木の日

菊根分手伝ひ好きな異人婆

蝶々や二階造りの大鶏舎

春暁の鶏三階の鶏舎に満つ

野遊や仔牛と組んで土手を落つ

野火明り丘のコロニヤ四五戸づゝ

春水に流るる森の大芥

春の風大王椰子の張りし葉に

啓蟄の土に挿したる造花かな

大根の木が倒れ蛇穴を出づ

家長たるわが愚かさよ転耕す

罵られつゝ遅れつゝ畑打つ

種深く蒔いて川辺の鳥を追ふ

種痘待つ路辺の山羊髯草に掛け

種痘子の泣けば悲しむ連れの犬

白き馬ありふれて古草食める

## 夏

水牛を鞭つしぶき上りけり

船着きし島の向ふの夏の海

旋風のあといつまでもマンガ落つ

トマテ畑畝を違へて訪ね来し

虹の戸に夕餉一皿持ちて食ふ

羽蟻翔つのならと野良戻り来る

汗入れてから鍬いらぬ小手伝

汗の顔光るニグロと黄昏るゝ

木蔭人羽叩く如く立ち出でし

木蔭山羊騎士も斯くやと角合せ

睡蓮の岸の木蔭の乞食かな

はつきりと道違へしよ日車草

着く汽車に人走り入る雨期の宿

大喜雨を納屋に戻って居られしと

門までの主客に走る蜥蜴かな

人居らぬ木蔭に重ねある荷物

街頭に出会ひし妻とビール飲む

掛声を立てつゝビール抜き廻る

氷盛る盥の外に蟹這へる

東蟹の山るざり合ひ石畳

夏山の邦人茶屋の物語

邦人の居らぬ地は無し夏野茶屋

牧牛の名を呼びながら帰省せる

病牛の長らへて居し帰省かな

夏園や紺青の孔雀緋のアララ

立てゝ研ぐ芝刈鎌の刃わたりよ

寝まらんと云ひて別れて外寝する

日焼して互に帰り惜み居り

国涼し親しみつゝもポ語知らず

腹黒く思ひ思はれ初笑

花椰子やぶつ違ひ立つ円柱

金魚玉インコの円き籠と吊る

青嵐息を止めつゝ牛迫へる

青嵐牛飼やめて馬も飼はず

ハンモック章魚の木の根に吊り並べ

蟹舟の今あげし網蟹居たり

ジャツカもぐ再び霧に見失ひ

椰子の実とバナナの中のジャツカ買ふ

夏服の移民と出合ふリオ市中

窓開けて寝につくりオも夜の秋

衰へし蚊火に人来て用急ぐ

なめくじの戸を晴々と今朝出づる

筈の夜明けに動く事知れり

メロン買ふ時片仮名を思ひけり

朝より入りて籠編む大木蔭

緑蔭にカナリヤの籠吊りて読む

翔ち上る蝶に苺をもぎ移り

畑西瓜十本の蔓しがらめる

蜥蜴飛ぶパンパの草は藻に似たり

飛ぶ蜥蜴迫ふにあらねど馬に鞭

古き町の古き木蔭に立寄れる

美しと見し此の町の人涼し

幌日除崖にはりつく四階建て

冷蔵庫欲しと思ひし時も過ぎ

長汀のバスのあとより涼み馬車

泳ぎ場に飛び来し毯を蹴返せる

滝水の流と競ひ汽車下る

此の滝の町の流の皆迅し

初ミサをさして野路行き町に行く

野良戻る夫婦彼方の喜雨の家

雲の峯大河の彼方橋架かり

州道か土地売道か飛ぶ蜥蜴

濯ぎ女は舶子らの妻か月見草

刺しもする河港の宿の燈蛾かな

裸子の行く街路樹のけんぽ梨

山の影野路の西日を隔てたる

庭に水やれば裸に蝶あたる

燃えつかぬ風呂の煙の夏の月

虻痒し野良靴を踏み鳴らし去る

おこり病むわが家の土間をいかに見ん

蝶の夫青葉の上に降りて待つ

飴色の肌をぬぎたる新樹かな

蔓ばらをくゝる露台の円柱

ばら垣に角ふり立てゝ放れ牛

蚤飛んで邦字新聞記者泊る

まだきより草取って午後出勤す

夏山家客の散歩に猫ついて

螢火や客送る人垣に寄り

夏野路の犬よ屈みて体搔く

茂る草食べあきて綱長き山羊

夕焼けて今も悲しき奴隸小屋

山人の背の汗拭くを待つて聞く

ビヤホール片腕なくてよき男

夜雨の音かなしとて酌むビールかな

アカシヤを探ねて憩ふ園木蔭

夏芒刈つて小公園手入

梅雨の月章魚木の足宙ぶらりん

十二時の夜の舗道の藤椅子かな

長き身を折りて藻にのり熱帯魚

鎧着て藻にぶらさがる熱帯魚

菅笠に似し椰子帽子草を刈る

戊年の七十三の椰子帽子

初夢や牧牛を追ふ若きわれ

虹の野や空の汽車行くこの時刻

夜の花昼咲いて園梅雨あがる

首を背に畳みし駝鳥檻の梅雨

夏園の大王椰子の一ト木立

夏園や大王椰子の男ぶり

西瓜買って夜の船を待つ河港かな

道ばたの家の娼婦は跣足なる

盆踊を嫌ふ二世とビール酌む

コロニヤの娘すがたの夕涼み

園の芥子神父聖書を見つゝ過ぐ

朝蔭の散髪垣に鏡のせ

草清水道をゆづらぬ放れ馬

病む馬に草の尺蠖這ひ移り

アリアンサ味噌煮つまりし茄子汁

吊床に夜の川見ゆる泊りかな

行水をさせたる末子抱いて寝る

寝台に寝莫産の巾が余るとて

妻のせし馬首初ミサに向けにけり

開墾の昔初夢にも悲し

ベランダの卓の晩夏の花は何

欠け瓶にコツポデレーテ活けてよし

金魚池囲みて植木鉢の木々

熱帯魚参観帳に署名する

還曆の移民自祝の鯨作る

喜雨祝ふ人々を舐め廻る犬

毛虫焼く腕もぎとりし如き枝

毛虫焼く妻の火の竿荒々し

自動車を拭き汗を拭き街路樹下

鉦山町や自転車に憑く蚊喰鳥

夕涼の鼓笛の稽古街路（ルア）を出づ

雨を乞ふ子供ばかりの列なりし

浜木綿に流人の如く草履捨つ

夏服や唇赤く色白く

## 秋

穴まどひ打つべきかとて返りみぬ

翮雲驀進の汽車しざる馬車

馬肥えぬ夜目にも漆光りして

音もなく従き来し牧馬肥えにけり

藁塚に寝て吠ゆ犬に父帰る

嫁貫ひ藁塚がくれ来て居りぬ

棉摘や籠あける間も惜みつゝ

わが膝に彼のこぼせし夜食かな

鶴来る牧場の湖に舞ひもして

泳ぎ入りし秋の大河の犬を呼ぶ

霧飛ぶや海なく山なき移民の地

人の名の移民の町よ天の川

薬掘る病める頭に布巻いて

伐る竹にまた後しざる立話

澄む水に屈めば人と居る如し

竹春や富めば長生きする移民

散らばって城址を見るや草の花

ベンチの子眠れるを見て柿食へる

影法師わが門に伸び月を来る

月を待つ馬つなぎ替へ鞭下ろし

秋草の萩の如きを牛食める

柵に依る牛草の穂に透ける牛

啄木鳥の音飛び違ひつゝ明けぬ

啄木鳥のこだま棹さす水にあり

新藁を負うて一人は早戻り

牧場より馬車戻るまで木藪掘る

土産物買ふ物も無く柿を買ふ

寒かりし旅を戻りて冬支度

鰯雲わが生立と違ふ町

ポ語とは又異なる会話走馬燈

街路樹の木の実食はれもするといふ

園の鹿造りし岩の古びやう

薄黒き塩の山吹く秋の風

夜食中賃錢貰ふ名を呼ばれ

古都の人虫を聞きゐて親切に

長き夜の貧しき家に人寄れる

天の川道連れもなく村を過ぎ

天の川何処にあれど老ゆのみぞ

心無く手をかざし見し凶作地

嵩高に何積む馬車よ凶作地

慰めの言葉は悲し秋の風

わが敵か味方か月に立話

嘴の木の實をはさむ隙間かな

唐黍を噛む緋アララの黒き舌

豚飼のコスモス折るゝ詮もなし

鶏頭や水やれば赤くなる土に

夜学師のバス下りし手に接吻す

夜学子の照らし出されて端麗に

霧こめし階段口の靴磨き

うづくまる乞食の前を霧に行く

豊年の村の乙女の名はマリヤ

諸穫りしわれ豆植ゑし彼と酌む

乗馬肥えて畳の上を行く如し

放れ馬肥えてポン屋の前に居り

国境の歴史は悲し秋燈下

珈琲の国の奥地の稲の秋

仲悪しき二人夜業に残りしと

豊年も火酒ならざれば酔出でず

酒気ありて馬に乗り居り菊の主

枝豆に尊き方の頬笑みぬ

足音に鯉はねて寄る廊の秋

わが庭のパンパ芒の月の雨

ぶつきりの魚買ひ迷ひ鯛買ふ

深秋の青物市に小鳥買ふ

秋の山後ろに巨船入港す

夕露や幌馬車宿の馬五匹

芋の葉をふちどる露の粒々よ

芋の露微塵の中の玉一つ

壑屋とは仮屋の仮屋小望月

ボテキンに火酒飲み去るや小望月

鷹揚にニグロウなづき柿を摘む

摘棉を秤りて曲りたる庭木

悲しめる人の影寄る受難節

わが町の貧しき人等ユダを打つ

パイネーラの落花搔きては大根蒔く

芋がらを土間に投げ捨て妻疲れ

木の実降る山家に職を求め行く

腰かけし尻を刺せしも草虱

馬肥えて耕主も肥えて憎々し

夜寒はや外套を着て老移民

客が弾く店のピアノや翳雲

カニバルの曲われ去ればみだらなる

夜の鳥か鹿の声かと火酒に酔ふ

此の鹿ももとより啼かず園大樹

此の町の夕月夜大エスの像

ロータリー倶楽部例会ビルの月

露しとど芥火燃ゆる草の中

秋草のフアゼンデーロといふ花も

秋茄子焼いて夜となる墾の飯

土間の鞍壁の角笛月さして

渡り鳥  
仰げば馬も立どまり

## 冬

熱燗や鞆の金を分けてやる

冬灯  
虎髭立てゝほしいまゝ

障子開けて冬の紅葉に間に合ひし

戻り来て用事なかりし毛糸編む

トラツクより下ろす太鼓や労働祭

船火事の燃えて離るゝボートかな

水鳥に人影のなき蒸汽航く

寒釣に貸して休めり河蒸汽

人の如起きあがる楢割りにけり

野良の靴脱がせて貰ふ風邪寝かな

瓢骨忌瓢骨会といふ句会

瓢骨忌水竹居より来し葉書

頂に牛現はれて牧枯るゝ

落葉踏む馬足音もなく老いし

鹿壳の顎をしやくって負け呉れぬ

兎汁噛み出せしもの炉にくべる

狐火や酒飲んでゐて遅くなり

狐火の映るわれ等の革衣

狩の弾惜みて進む山深し

立てかけし戸に吊る銃や狩の宿

切株の燃えて崖落つ焚火かな

股火鉢して道焚火見て居りぬ

白逃げし子等に味噌搗き杵あがる

飯食うて来て力あり根木打

鶏の減りて見に行く狐畏

狐奴と罵りし夜の畏かゝる

赤き馬車尾立狐と暮れにけり

借となる物々交換の鴨一羽

夜の霜歩道にのりて寝るジープ

枯園や侍りて赤きジープの輪

冬の雨はげし樹海の町なれば

冬雨の降るより居らぬ野良の人

炭負うて余りに日本移民らし

隻眼の移民に青し冬の草

柔かに指嚙んではやインコ慣れ

鳶絡む崖に鷹居し樹海中

熟爛も移民の宿も彼好かず

熟爛や雑誌で卓の上を掃き

汽車を見ぬ三十年や荃漬くる

店しめてたくあん漬くる夜更かな

仲悪しき夫婦それぞれ春を待つ

牧牛の子を産み出せし春を待つ

冬ざれや吾起てば彼石に掛け

日向ぼこして悲しめるわが生活

玉子酒顔に血にじみ痛くなし

悴める如き手足を診察す

隙間風涼しかれとて建てし家

青年を懸菜の下に待つ乙女

眠り木兔檻に覚め木兔園の木に

三日月の鸚鵡の眉を君知るや

畦みちの落葉さらへしつむじかな

わだかまる枯蔓にのり木を伐れる

会終る日脚伸びたる階の上に

冬服の日本座敷の女客

目覚ましのラジオに咳をして起きる

乳しぼる牛ら咳して暁待てる

シユラスコや少年馬に寝呆け乗る

馬上の妻抱き下ろしてシユラスコに

群オーム翔ち去りし木の飼オーム

此の町のサントの供物盗るアララ

芭蕉枯る丈なす草ともたれ合ひ

雨侘びし風寒しとて芭蕉枯る

われと妻行く間をよぎる時雨人

頼被二世の母は皆老いて

大南風夜となる家に犬戻る

木の葉散る影われを越す月夜かな

玻璃戸より見し霜窓を開けし霜

霜ふりて悲しき村となるばかり

板床を歩める靴に炭つぶれ

葱買ひしあと駈け去りし野菜馬車

冬木立投資と云へば土地を買ひ

狐色して丈高き草枯るゝ

牡蠣むいてリオの女は色黒き

牡蠣をむくナイフ指さすリオの地図

冬休無帽のためか日焼せる

寒かりし日本の記憶薄らぎし

毛皮着て戻り頬冠して戻り

酒飲みて飯食はぬ日の根深汁

一軒家の焚火祭の大家族

マストロの竿秀でたる冬構

小春人道曲りわれ道違へ

日向ぼこ飛機の音また樹にかくれ

牛は牧に騾馬は戸口に山眠る

山眠る茶屋の貫ひ子日本人

夕空に残り枯野に無き日かな

秃鷹や移民ゆかりの古き塔

冬晴の船に乗る椰子帽子買ふ

南聖や冬も跣足の莫産織女

山伐りのひとり打つ斧力あり

ニグロの子今日も裸や冬耕す

吹きつけて墾屋焼く如焚火燃ゆ

味噌搗くや庭をならして臼を据え

迫ひつきし騎馬杣なりし虎落笛

ボテキンに寄りてギタ弾く狩人ら

身震ひをする炭馬に舟発てり

バルサ待つ焚火に馬を乗りつけし

ひとり子のもたるる壁の日脚伸ぶ

枯芝に聖像寝かせ園修理

熟欄の猪口かほどまで小かりしや

煮擬やりオ曇とて昨日今日

梟や道曲るごと牧扉

切株にのりて狐火拵ごりぬ

捨て馬を手なづけてをり大根引

水飲みに来し牛落葉舐めても見

冬ぬくし十五日目で大仔牛

ブラジルの薄紫となる冬菜

毛布の値つき出してある通りかな

古毛布物価の安き頃のこと

壺を頭に娘ら行く方や珈琲摘む

汽車を見る子の寒き日も馬柵にのり

二十五年はわれ等の歴史瓢骨忌

パイナ飛ぶ中流といふ暮し無く

山眠り面影もなく移民老い

山眠り里人も旅人も驛馬

越後笹岡

（天正十年―昭和三年二月）

海苔舟や相傾けて掻き競ふ

燃えてゐる大枝もてり野焼人

居合せてかけ手伝ひぬ涅槃像

生欠伸噛み殺したる日永僧

凧の尾の上り糲穀こぼしつゝ

崖藤に仰向き漕げるボートかな

朧月提灯あればあるでよし

承塵(なげし)なる槍薙刀や花の宿

春水や船の流せし料理屑

連峯の中の故山やいかのぼり

東風の戸や鳴り静まりて女夫鈴

東風吹くや師匠が門の立話

新参を娘と思はぶや年頃も

初午や堂に這入りてお世話人

捕へたる枝をひっぱり桑を摘む

畑打や笠ほどばしる雨となり

土手裏にあがる鍬かな田を打てる

とばっちり噛みて耕馬を罵れり

雨濡れに精根のれる田打かな

花時を馬に蹴られて臥すとは

母の忌や勘当許りて春の炉に

提灯によけるし犬や雪解道

妻伴れし酒の機嫌や雪解道

落椿押し出したる門扉かな

東風の波たゝみ入るなり松の陰

夫が焼く土手の煙や昼餉時

老の杖互によけて撲つ鶏よ

雨そゝぐ盤石這へり藤の池

耕牛やはるかにありてとゞまらず

一人づゝ風に耐へ打つ棚田かな

田一枚隔り顔や田搔牛

畦塗りに夕騒ぎせる田水かな

塗り畦の息吹き乾く天気かな

塗り畦の上なる笠や去に仕度

道々もさとされながら出代りぬ

鍬かたげ午餉戻りや彼岸の入り

土手裏に一筋張れり  
凧の糸

夜ざくらの袖曳き  
枝やふりかへる

崖藤に馬車つき  
あたり鞭あぐる

御輿下くぐれよ  
病児もう一度

母校今は村役場  
なり桐の花

一つ餌に二つ逆  
立つ金魚かな

聞法の扇の中を来て座る

芦切や万代橋の人通り

芦切や背の短冊汗ばまん

西瓜売上り框に腹這ひし

踊りつゝ見やりし月の波頭

海女が子の叱られ逃げて泳ぎけり

早乙女のうち連れわたる俵堰

白扇や木の間にも居る会葬者

地藏会や通して貫ふ夜の荷馬車

楽人へあほぐ団扇や柱陰

これやこの永久の盲や団扇風

勝馬に従いて走りて帰る子等

帰省子を待ちあぐみ寝しところとて

瓜番や仮寝の肱へ月さして

螢火の降り落されぬ笠の上

河骨や馬乗り入れてさかのぼり

もたせある笠かむり出ぬ蟬時雨

畦々やくり出したる早苗取

流木の山とりまける月見草

兵士ゐる信濃の奥の梅雨の駅

土手裏に行軍休む夜水番

こそりともさせずに野良へ昼寝起

足裏に跣足こすりて話しけり

土けむりかむる一騎やくらべ馬

雁を見るに上目遣ひや葬人

庵の秋はめて障子の歪みかな

萩の花客送る灯をかゝげけり

新米やたまく帰る休暇兵

物言へば潤む眼や老の秋

秋の蚊に立てゝ香りぬ蚊遣香

かけてやる背の合羽や秋の雨

仰向いて荷車曳きぬ雁の棹

秋晴や訪へば居りたる二階人

乗叩く竿枝を打ち葉を散らし

納屋の戸の倒れ合ひたる野分かな

釣橋の一線ありぬ萩の中

軒下に寄りても行くや天の川

鴟高音沼にうつれる枝を得て

くら闇に友犬居りぬ月の門

まのあたり一葉の欠けし明るさよ

稲刈るや夜明けはなれて彼方にも

稲運ぶ今日もおつつけ十車

なげしなる提灯貸しぬ紅葉宿

たきかけし松茸飯を待つ我等

物乞の秋の扇をひろげけり

萱刈の刈あらはれぬ谷向ひ

渡り鳥押し返すなり庵の上

ふたゝびの行手の雁や佐渡巡り

囿守るあまり静けく空仰ぎ

古酒の壺筵にとんと置き据ゑぬ

秋暑き広場よぎりぬ工夫長

泉井や花火明りの絶間なく

草むらに提灯明き墓参かな

門火焚く出て来し尉をふり返り

石垣や釣り代り居る沙魚日和

稻雀下りて畦色かはりたる

引つれて立つ鳥もなき鳴子かな

遠鳴子拍子ぬけして立つ鳥よ

鮭舟や二手に綱を張り下る

払ひ合ふ雪の合羽や針子達

雪杳や提灯持ちて先だつ子

相棒の腹ごしらへや櫓の宿

入営の雪暁の花火かな

藁苞の鶏逃がしたる礼者かな

年玉を商ひながら配りけり

鶏の毛を筆りゐる布子かな

何を蒔く畝作りたる冬田かな

筵戸の濡れこはぐりぬ冬の雨

炉の媪人見逮ひて語らへる

追ひかけて布施を渡しぬ寒念仏

枯藪にひっかけ干せるもんぺかな

笹啼や飯櫃負うて杣が妻

わけてやる炭をつぎ置き兄書生

此櫓のあとに従き行くことにする

雪沓の解け緒結べる前の僧

スケートや連峯我につきめぐる

渡舟下りて宿るばかりよ浮寝鳥

老が身のなぐさみ店や早炬燵

旅人の詣で交じりぬ神無月

帰山して焚火の輪にも見えられし

縁にある死人の湯婆おそれけり

風あたりさこそや丘の干菜宿

餅搗きの湯気をかむりて掛乞へる

雑煮腹餓鬼の腹とも云ふべかり

豆撒や雪沓穿いて蔵々に

木洩れ日のとみに夕づき落葉搔

竹馬や股間に犬を従へる

鴨撃ちに今出し父や銃の音

畦道や呼び戻されて狩の犬

道の犬来て逞しき焚火かな

焚火の輪後ろの櫓に雪ふれる

てらてらと炭とりの柄の手ずれかな

入日の日ざしてくらし布団蔵

山下りて時雨るゝ納屋へ戻りけり

茎の石押し屈み居て話す妻

月の人櫓を従け来ぬ蓑陰に

たゞ人の提灯従けり寒念仏

提灯をうつ雪もなく積りけり

番犬や夜半の櫓駈け過ぎしのみ

蓑笠に忽ち積る雪を搔く

蓑払ふ袖におつなり笠の雪

おろしたる枝へのりおつ年木樵

年木樵る笏たほれて屏風岩

犬つれて出づるともなし霜の門

一々の穴に物云ひ施行かな

掛乞にかまはず藁を打はじむ

## 跋

虚子先生がホトトギス雑詠の選をやめてから、亡くなられる迄の七、八年間に、特に乞うて見て頂いた拙句が三百余りある。今度三十四年ぶりにブラジルから帰って、叡山の虚子塔に詣で、鎌倉の虚子忌に参じた時に、此の事を思ひ出し、比の虚子選を根幹として一冊にしておきたいと思った。

又、三十四年ぶりに越後笹岡の土を踏み、故郷の俳人連に温かく迎へられた時に、私がブラジルに渡る前に作った笹岡の句で、虚子選をへたものが百句余りあることを思ひ出し、これも一冊のうちにおさめて置きたいと思った。

昭和二十七年刊行の念腹句集は、ブラジル渡航の昭和二年三月から、二十六年十二月までの句を収録したものであったが、今度の句集はそれに次ぐ、昭和二十七年一月より三十五年十二月迄の四百五十四句を収録した。

昭和二十九年九月に、住み馴れた奥地のアリアンサから、パウルー市に移住した。パウルーはサンパウロ州の真中に位する地方都市なので、子等の勉強と俳句活動の便利を考へての事であった。此の句集の大部分の句は、此処を根城として作られたものである。

前述の越後笹岡で作った、ブラジル渡航前の句は附録としておさめた。これは大正十年から昭和二年三月までのものであって、今にしてみれば随分幼稚な句、乱暴な句も目につくが、其の頃の思ひ出に繋が

るものは残しのこししたら百四十九句となった。故に本集はさきの念腹句集に次ぐものであるけれども、此の附録に限り、念腹句集に先立つものとなる。

中田みづほ先生と高野素十先生は、虚子先生に次いで大切な私の師匠であるので、それぞれに序文を乞ひ、その上に虚子選以外の句の校閲を願った。装画は小杉放庵先生を煩わした。これは家田小刀子氏の友情深き仲介に拠るものである。

此の他、此のさゝやかなる句集の上梓に当って力添へ下すつた、宮坂幾別春、荒垣冬虚の両氏、ならびに暮しの手帖社の方々に深く感謝の意を表す。

昭和三十六年八月二十日

東京神田駿河台朝き里にて 佐藤念腹

念腹句集第二 定価四百五十円

昭和参拾六年拾月拾五日印刷 昭和参拾六年拾壹月壹日発行

著者 佐藤念腹

発行者 大橋鎮子 東京都中央区銀座西八丁目五番地

発行所 暮しの手帖社 東京都中央区銀座西八丁目五番地

印刷者 青山与三次郎 東京都港区芝愛宕町貳丁目八五番地

印刷所 青山印刷株式会社 東京都港区芝愛宕町貳丁目八五番地